

土石流災害と伝承

—身近な防災のために—

講演者 信州大学人文学部教授； 笹本 正治氏



犀川天然ダム決壊後の長野市小松原 永井善左衛門 筆



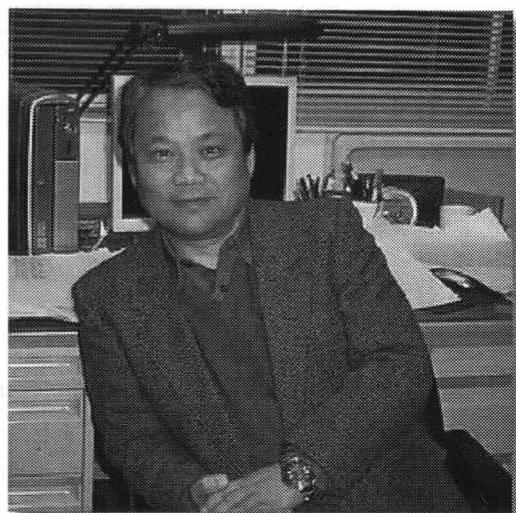
平成18年7月岡谷市上野原の土石流

日時 平成19年5月18日(金) 15:00~17:00
場所 サンパルテ山王 〒380-8586 長野市岡田町30-20
会費 無料(聴講自由)

問い合わせ先: (社) 日本地すべり学会中部支部 電話026-284-0833

主催 (社) 日本地すべり学会中部支部 後援 長野県治水砂防協会

講演者プロフィール



笹本正治（ささもとしょうじ）

信州大学人文学部教授。博士（歴史学）。1951年山梨県敷島町（現甲斐市）生まれ。

名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期修了。

前長野県文化財保護審議会会長。

山梨県文化財保護審議会委員、山梨県史編纂委員。

研究は、武田信玄を中心とする戦国時代史、中世から近世にかけての音に対するイメージの変化、災害史、商人・職人史など多岐にわたる。市町村とつながりながら、地域に元気を与える活動も繰り返している。

著書に、『戦国大名武田氏の研究』（思文閣出版）、『蛇拔・異人・木霊』（岩田書院）、『中世の災害予兆』（吉川弘文館）、『武田信玄』（中公新書）、『鳴動する中世』（朝日選書）、『戦国大名の日常生活』（講談社選書メチエ）、『異郷を結ぶ商人と職人』（中央公論新社）、『地域おこしと文化財』（ほおずき書籍）、『戦国大名と信濃の合戦』（一草舎）、『武田信玄』（ミネルヴァ書房）、『実録 戦国時代の民衆たち』（一草舎）、『軍師 山本勘助』（新人物往来社）、『善光寺の不思議と伝説』（一草舎）など多数。

はじめに

身の回りの様々な危険

その一つに土砂の動きによるものー土石流・地滑りなどーがある

長野県はそうした災害の場

災害への認識

1 岡谷の災害

岡谷で土石流 鉄砲水 5人死亡3人不明

『長野日報』<http://www.nagano-np.co.jp/modules/news/article.php?storyid=4264> 更新:2006-7-20

活発な梅雨前線の影響で、18日から19日午前にかけて県内は記録的な大雨となり、諏訪地方では土砂崩れなどの被害が相次いだ。岡谷市湊地区と川岸東地区では19日午前4時40分ごろから鉄砲水と土石流が相次いで発生し、住宅を押し流すなどして8人が行方不明となり、うち5人が遺体で発見された。ほかに、辰野町小野で1人が行方不明になっている。この豪雨で、国道20号を含む諏訪地方の幹線道や鉄道が各所で寸断されたほか、約6500人に避難勧告が出された。

同日午前5時40分に設置された岡谷市災害対策本部によると、大規模な土石流は、湊の久保寺付近、川岸の志平（しびら）、鮎沢で発生した。

湊地区では午前5時前に2回の土石流が発生した。久保寺付近では道路に土石流が流れ込み、なぎ倒された近くの神社の大木が、民家に倒れ込んだ。家屋は厚さ30センチ以上の土砂で埋まり、泥の中で横倒しになった車両も。県は陸上自衛隊に災害派遣出動を要請、隊員約130人が捜索した。

午前11時ごろに起きた3回目の土石流は湊小学校近くまで流出。家屋の倒壊や床下浸水などの被害も相次いだ。

午後2時18分、上流部で市消防団第7分団の小坂陽司さん(46)ら男性2人が遺体で見つかった。同7時までには、さらに男女1人ずつの遺体が見つかった。小坂さんは救助作業をしていた際、行方不明になった。160人態勢で捜索しているが、依然として3人が行方不明になっている。

一方、川岸地区の志平では住宅4棟が土石流に流されて倒壊。2人が行方不明となり、同日正午ごろ、林孝幸さん(75)＝川岸東2＝が遺体で見つかった。鮎沢でも家屋が倒壊し、JRの線路内にも土砂が流出した。(以下略)

→この地域は地元では安全といわれていた

諏訪市四賀桑原の鮎沢さんの「鮎沢系図」

鮎沢肥前守六代之孫鮎沢源吾・孫右衛門・姉共ニ鮎沢村ニ而誕生、姉者橋原村へ嫁ス、此時正保二丙戌五月廿三日、蛇崩レニ而家屋鋪不残押流され、右兩人漸く命をたすかり闇夜橋原村姉之方江引越、正保三丙戌八月横川村江引移る、正保二兄十才、弟八才

鮎沢肥前守の六代の孫に当たる鮎沢源吾、孫右衛門は姉と共に鮎沢村（岡谷市川岸）において誕生した。姉は橋原村（同）へ嫁いだ。この時、正保二年五月二十三日（ユリウス暦＝西暦1645年6月7日、グレゴリオ暦＝西暦1645年6月17日）、蛇崩れによって家屋敷が残

らず押し流された。源吾と孫右衛門の二人はようやく命が助かり、橋原村の姉の所へ引越した。その後正保三年八月に横川村へ引き移った。蛇崩れにあった正保二年に兄は十才、弟は八才であった。

→土石流が1645年にあった＝もっとふるさとに目を向けよう

2 蒲原沢の土石流

1996年12月6日、安曇郡小谷村北小谷蒲原沢で起きた土石流では、14人もの犠牲

→前年7月11日の梅雨前線豪雨による災害の復旧工事に従事

県松本市の業者は事故前日と当日「土石流の恐れがある」として作業を見合わせていた

1996年12月8日付『朝日新聞』東京本社版

別の沢では工事を中止 業者が判断

十四人が土砂にのみ込まれた長野県小谷村の姫川支流とは別の沢の工事を担当していた同県松本市の業者が、事故前日の五日と当日の六日、「土石流の恐れがある」として、作業を見合わせていたことが七日、明らかになった。一帯が地滑り地区であることに配慮したという。

この業者は、事故のあった姫川の支流から四*。ほど南にある別の支流で治山工事をしてきた。約十人が作業をしていたが、五日に降った雨で沢の上流に水がたまっているのを作業員らが見つけた。幹部が現場を見回り、「増水して一気に流れてくると危険」と判断、作業を休んだという。

六日も、前日ほど量は多くはなかったが、沢に水が出ていたため作業しなかったという。

→地元では経験があった

1996年12月8日『朝日新聞』

「沢の濁り、山が動く知らせ」 言い伝え信じ、作業員避難

七日午前九時ごろ、長野県小谷村の災害現場でパトカーや救急車のサイレンが一斉に響き渡った。国界橋上流約八百mの地点で、救出に当たっていた作業員が、沢が濁っているのを発見し、災害本部に通報。

作業員の大半が安全な高台に避難した。この朝到着した油圧ショベルも現場に入れず、立ち往生。作業員たちは、不安な面持ちで現場を見下ろしていた。対策本部は、「水のごりは増したわけではなく、それほど危険な状態ではなかった」として作業を一時間半後に再開した。現場は、地盤がもともと弱く、地元の人によれば、「黒にごりが出たら、危ない」と昔から言い伝えられていた。地表の黒土が沢に流れ込んでいるためで、「山が動く」可能性が高いという。作業員の一人は「敏感になっているんだ」と話していた。地元に住む救出作業員は「よその県から来た作業員たちは、ここの自然のことがよく分かっていない。それも、災害の原因の一つではないか」と話していた。

*犠牲者の出身地は東北地方を中心とし、高齢な冬季の出稼ぎ者

→この地域の土石流の危険性を知らない出稼ぎ者が災害の犠牲

小谷村の災害年表

宝永4年(1707)10月4日一未の刻大地震、家屋が多数倒れる(小谷村誌)。

正徳4年(1714)3月15日一大地震で坪の沢大山抜け(小谷村誌)。30人、牛馬8匹死ぬ

(信府統記)。

享保 10 年 (1725) 7 月 7 日—大地震 (小谷村誌)。

享保 19 年 (1734) —浦川上流崩壊、諏訪神社社殿や人家多数流出 (小谷村誌)。

寛保 2 年 (1742) 6 月 29 日—地震で千国親沢が抜け落ち、新道を開く (小谷村誌)。

文化 6 年 (1809) 1 月 21 日—大久保山が抜け、家屋 22 軒倒壊 (小谷村誌)。

文政 1 年 (1818) 12 月 31 日—李平に雪崩が発生し、人家 6 軒押し潰す、死者 7 名 (小谷村誌)。

文政 2 年 (1819) 1 月—李平に雪崩、6 軒が被害 (小谷村誌)。

文政 7 年 (1824) 12 月 14 日—池原に雪崩発生、死者 4 名 (小谷村誌)。

文政年間—ボッカの宿泊中、戸倉山の大雪崩があり、21 人が死亡したと伝えられる (歴史の道調査報告書Ⅷ)。

天保 3 年 (1832) 3 月 18 日—横川山抜け (小谷村誌)。

天保 12 年 (1841) 1 月—伊折・柳瀬・宇 (雨) 中に雪崩起こる (小谷村誌)。

天保 12 年 (1841) 4 月 8 日—浦川上流崩落、人家・耕地流失 (小谷村誌)。

弘化 3 年 (1846) 4 月—大地震、梨平・坪の沢家屋倒壊 (小谷村誌)。

弘化 4 年 (1847) 3 月 24 日—善光寺地震、小谷地方でも死者・家屋倒壊多数 (小谷村誌)。

安政 6 年 (1859) 3 月 24 日—大地震で南日道の飲み水出口が倒壊 (小谷村誌)。

文久 3 年 (1863) 5 月 14 日—李平水害、人家 3 軒倒壊 (小谷村誌)。

元治 1 年 (1864) 7 月 18 日—大網水害、人家田畑に大被害 (小谷村誌)。

明治 5 年 (1872) —清水山の間から地滑り、2 戸移転 (小谷村誌)。

明治 18 年 (1885) 4 月 11 ～ 13 日—北小谷が 3 日半日の大雨により被害 (小谷村誌)。

明治 20 年 (1887) 4 月 1 ～ 4 日—清水山奈良尾地籍で地滑り発生、田畑・林・原野に多くの被害 (小谷村誌)。

明治 20 年 (1887) 9 月 27 日—葛草連で地滑り、明才堰下より中谷川へ流出 (小谷村誌)。

明治 23 年 (1890) ～ 24 年—清水山奈良尾峠の東方から西端にわたり地滑り、被災者 9 戸 (小谷村誌)。

明治 29 年 (1896) 10 月—南小谷で大暴風により橋流出 (北安曇郡誌一卷)。

明治 31 年 (1898) 9 月 6 ～ 7 日—中谷川・姫川の氾濫で被害が出る (小谷村誌)。

明治 32 年 (1899) —小土山に地滑り、姫川を堰き止める (北アルプス小谷ものがたり)。

明治 35 年 (1902) 7 月—姫川洪水、小土山が崩壊 (北安曇郡誌一卷)。

明治 36 年 (1903) 5 月 18 日—暴風により県道柳瀬・月岡・親沢の三橋梁流失、その他山沢崩落 (小谷村誌)。

明治 38 年 (1905) 6 月—姫川流域各地に水害、小谷凶作となる。収穫皆無の田が中土村で 6 町 4 反に及ぶ (小谷村誌)。

明治 39 年 (1906) 4 月 11 日—中谷村塩の久保融雪のため地滑り、人家十数戸移転 (小谷村誌)。

明治 39 年 (1906) 10 月 2 日—降雨により白岩崩落 (北安曇郡誌一卷)。

明治 40 年 (1907) 12 月 7 日—小谷地方に地震 (小谷村誌)。

明治 40 年 (1907) —清水山が山王神社の西方柴原平全域にわたって地滑り、住宅 3 戸が移築 (小谷村誌)。

明治41年(1908)2月一中土村半坂で地滑り、4戸移転(小谷村誌)。
明治44年(1911)6月一中土村道田に地滑り、人家2戸埋没(小谷村誌)。
明治44年(1911)7月一洪水のため姫川が南小谷村、中土村に流出、倒壊の家屋有り(小谷村誌)。
明治44年(1911)8月8日一稗田山再度崩落、同時に中土村立・高地坂崩落(小谷村誌)。
明治45年(1912)4月26日一稗田山崩壊、5戸が埋没・流出(小谷村誌)。
明治45年(1912)5月4日一稗田山崩壊(小谷村誌)。
明治45年(1912)7月21～22日一梅雨により稗田山が堰き止めた湖水決壊、3戸流出(小谷村誌)。
明治45年(1912)一中土村白岩で館山の西北部数十町歩、中谷川に陥落(小谷村誌)。
大正1年(1912)9月23日一暴風雨のため南小谷で家屋倒壊ほか被害多数、源長寺も倒壊(小谷村誌)。
大正2年(1913)一清水山が中沢上流の山入地区より押し出し、居宅3戸移築、水田地帯5町歩被害(小谷村誌)。
大正4年(1915)3月10日一中土村外沢平崩落(小谷村誌)。
大正4年(1915)4月1日一池原裏山崩落、姫川を堰き止め人家埋没(小谷村誌)。
大正6年(1917)3月16～17日一北小谷村横川地滑り11町歩、人家10戸危険となる(小谷村誌)。
大正6年(1917)7月一大雨により姫川出水、沿岸に被害(北安曇郡誌一卷)。
大正10年(1921)9月一暴風で被害、わらび平で2戸、峰1戸、千国崎で1戸が全壊(小谷村誌)。
大正12年(1923)4月一豪雨で姫川洪水、来馬地区の被害大(北安曇郡誌一卷)。
大正12年(1923)9月1日一関東大震災、村内にも地震あり(小谷村誌)。
大正14年(1925)7月一姫川洪水、宮本橋流出(小谷村誌)。
昭和1年(1926)一清水山上部の小林氏宅地に亀裂(小谷村誌)。
昭和2年(1927)4月12～27日一中土村清水山に地滑り発生、住宅九戸に被害(小谷村誌)。
昭和7年(1932)3月14日一12日の大降雨のため中土村字新屋地籍内に亀裂、地滑りの地籍約10町歩(小谷村誌)。
昭和9年(1934)2月9日一大平で雪崩発生、住家1戸埋没、死者8人、負傷者1人(小谷村誌)。
昭和9年(1934)4月4～6日一清水山・白岩地滑り発生、3戸倒壊(小谷村誌)。
昭和9年(1934)7月9日一豪雨で中谷川氾濫、橋梁流出(北安曇郡誌一卷)。
昭和10年(1935)6月一中土村黒倉において内務省直轄砂防工事開始、中土村清水山において農林省直轄砂防工事開始(小谷村誌)。
昭和11年(1936)6月28日一豪雨により北小谷の県道冠水(小谷村誌)。
昭和14年(1939)1月3日一大平山地滑り発生、4戸倒壊、県道不通となる(小谷村誌)。
昭和14年(1939)4月21日一風張山崩壊、大糸南線・県道不通。親沢地区4戸倒壊し、坪の沢地区下まで冠水(小谷村誌)。
昭和14年(1939)8月一大平山再度地滑り発生、4戸倒壊、県道不通となる(小谷村誌)。

昭和 19 年 (1944) 7 ～ 10 月一四回の洪水 (北安曇郡誌一卷)。
昭和 20 年 (1945) 4 月一大糸線現千国・南小谷間護岸決壊 (北安曇郡誌一卷)。
昭和 20 年 (1945) 7 月一姫川増水、大糸線護岸各所で決壊 (北安曇郡誌一卷)。
昭和 20 年 (1945) 10 月一姫川氾濫、第三姫川橋以遠不通 (北安曇郡誌一卷)。
昭和 21 年 (1946) 12 月 19 日一北小谷光明地籍で表層雪崩発生、1 戸倒壊、1 名死亡 (小谷村誌)。
昭和 22 年 (1947) 4 月一外沢で地滑り発生、14 戸中 12 戸が移転 (小谷村誌)。
昭和 23 年 (1948) 7 月一雷雨により風吹山堀土を押し出し、姫川を止める (北安曇郡誌一卷)。
昭和 32 年 (1957) 4 月一南小谷祖子山地滑り発生。1 戸全壊、死者 2 名 (小谷村誌)。
昭和 32 年 (1957) 8 月一大雨により大糸線不通 (北安曇郡誌一卷)。
昭和 34 年 (1959) 2 月 18 日一神平に地滑り、住宅 2 戸が危険となり、大糸線不通 (北アルプス小谷ものがたり)。
昭和 34 年 (1959) 7 月一姫川氾濫、大糸線中土・北小谷間築堤決壊 (北安曇郡誌一卷)。
昭和 34 年 (1959) 9 月 26 日一台風 15 号 (伊勢湾台風) による大被害発生、災害救助法が適用される。被害総額 1 億 2 千万円 (小谷村誌)。
昭和 35 年 (1960) 3 月 5 日一清水山地滑り発生、4 戸全壊、4 戸半壊、耕地 14 ヘクタールを失う (小谷村誌)。
昭和 35 年 (1960) 4 月 1 日一南小谷弥太郎に地滑り発生、住宅 1 戸、非住宅に被害。この年に弥太郎全戸転出 (小谷村誌)。
昭和 35 年 (1960) 8 月一小土山が国から「地滑り防止区域」の指定を受ける (北アルプス小谷ものがたり)。
昭和 36 年 (1961) 3 月 8 日一清水山地滑り発生、住宅 1 戸全壊。4 月 6 日に再発生、白岩で 1 戸移転。6 月 30 日また発生、住宅 1、倉庫 1 倒壊 (北アルプス小谷ものがたり)。
昭和 36 年 (1961) 9 月 16 日一台風 18 号により戸土分校大破 (小谷村誌)。
昭和 36 年 (1961) 11 月 26 日一上手村中通りに地滑り発生、住宅 1 危険となる (北アルプス小谷ものがたり)。
昭和 36 年 (1961) 一信濃木平地滑り (小谷村誌)。
昭和 37 年 (1962) 1 月一祖子山全戸転出 (小谷村誌)。
昭和 37 年 (1962) 4 月 4 日一月岡に地滑り発生、住宅 1 戸全壊 (北アルプス小谷ものがたり)。
昭和 38 年 (1963) 3 月 20 日一戸土に大規模な地滑り発生、田畑に被害 (小谷村誌)。
昭和 39 年 (1964) 4 月 7 日一白岩地籍に地滑り発生、家屋 1 戸避難 (北アルプス小谷ものがたり)。
昭和 39 年 (1964) 7 月 12 日一 9 日からの豪雨で千国崎護岸決壊ほかの被害 (村勢要覧)。
昭和 39 年 (1964) 10 月 21 日一浦川土砂流出、住宅 1 戸浸水 (北アルプス小谷ものがたり)。
昭和 40 年 (1965) 5 月 8 日一浦川で鉄砲水、浦川橋流失 (村勢要覧)。
昭和 40 年 (1965) 7 月 17 日一 12 日からの豪雨で各所に被害、大糸線の不通長期化 (村勢要覧)。

昭和 41 年 (1966) 2 月 25 日一戸土地区で地滑り発生、3 戸居住不能となる (小谷村誌)。
昭和 41 年 (1966) 3 月 1 日一清水山地籍に地滑り発生、耕地に被害が出る (北アルプス小谷ものがたり)。
昭和 41 年 (1966) 3 月 7 日一北日道に地滑り発生、3 戸居住不能となる (小谷村誌)。
昭和 44 年 (1969) 8 月 12 日一9 日からの豪雨により災害各所に発生、中土真木下県道決壊、燕岩護岸決壊、林道中土・土沢線決壊、清水山・上雨中に地滑り発生、3 世帯に避難勧告 (北アルプス小谷ものがたり)。
昭和 44 年 (1969) 9 月 10 日一集中豪雨により各所に被害 (村勢要覧)。
昭和 45 年 (1970) 4 月 11 日一滝の平に地滑り発生、住宅 1 戸半壊 (北アルプス小谷ものがたり)。
昭和 45 年 (1970) 4 月 21 日一月岡に地滑り発生、非住家 1 戸全壊 (北アルプス小谷ものがたり)。
昭和 45 年 (1970) 雪解け期一小土山に地滑りの兆候、泥崎地区では上部から水路を造り流水を地下に浸透させないようにする (北アルプス小谷ものがたり)。
昭和 46 年 (1971) 4 月 2 日一光明沢に鉄砲水、床上 1、床下 2 浸水、非住家 1 全壊 (北アルプス小谷ものがたり)。
昭和 46 年 (1971) 4 月 4 日一小土山地区に大規模な地滑りの兆候、5 世帯に避難勧告 (北アルプス小谷ものがたり)。
昭和 46 年 (1971) 7 月 16 日一小土山で地滑り、姫川を堰き止める。住宅 1、非住家 1 全壊、床上 10、床下 2 浸水、その他非住家 12 棟浸水 (北アルプス小谷ものがたり・小谷村誌)。
昭和 46 年 (1971) 11 月 29 日一柳瀬・杉山沢に鉄砲水、大糸線不通、住宅 2 戸に被害 (北アルプス小谷ものがたり)。
昭和 47 年 (1972) 一南小谷真木全戸転出 (小谷村誌)。
昭和 52 年 (1977) 3 月 25 日一姫川温泉で地滑り、死者 1 名、負傷者 3 名 (小谷村誌)。
昭和 56 年 (1981) 6 月 23 日一姫川増水、国道小谷橋西側決壊、交通止め (村勢要覧)。
昭和 56 年 (1981) 8 月 23 日一台風 15 号による村道等の災害 26 カ所 (小谷村誌)。
昭和 56 年 (1981) 11 月 30 日一姫川流域浦川砂防 20 周年及び清水山地滑り対策 25 周年記念式典 (小谷村誌)。
昭和 57 年 (1982) 8 月 1 日一台風 10 号により土砂崩落、大糸線不通 (村勢要覧)。
昭和 58 年 (1983) 9 月 16 日一中上葛草連全戸転出 (小谷村誌)。
昭和 59 年 (1984) 2 月 10 日一大雪のため災害救助法適用される (小谷村誌)。
昭和 59 年 (1984) 7 月 26 日一大雨で横根沢・東親沢氾濫 (村勢要覧)。
昭和 60 年 (1985) 7 月 8 日一大雨で十四日まで国道不通 (村勢要覧)。
昭和 62 年 (1987) 9 月 9 日一浦川国有林治山事業 30 周年記念式典 (小谷村誌)。
昭和 63 年 (1988) 12 月 21 日一県道千国北城線沓掛地籍で土砂崩落発生、5 名死亡、1 名重傷 (小谷村誌)。
平成 2 年 (1990) 2 月 11 日一樽池で鉄砲水発生、スキー客 2 名死亡 (小谷村誌)。
平成 3 年 (1991) 9 月 27 日一台風 19 号で 58 戸被害、被害総額推定 1 億 300 万円 (小谷村誌)。

平成 4 年 (1992) 1 月 28 日一県道川尻小谷糸魚川線白岩地区で地滑り、白岩から田中下間全面通行止め (小谷村誌)。

平成 7 年 (1995) 7 月 11・12 日一梅雨前線による豪雨災害⁽¹⁰⁾。

平成 8 年 (1996) 12 月 6 日一蒲原沢の土石流で 14 名が亡くなる。

→ 290 年間に 114 回、明治以降に限ると 130 年間に 96 回=こんなに災害があった

災害の伝説

大槻平

北小谷村深原部落の火葬場の下にある大槻平は昔大槻伝蔵といふ者の居た処だったといふ。伝蔵は真那板山崩落のため姫川が堰き止められた際、加賀の前田侯のところへ城を焼いておちついたといふ。- 『北安曇郡郷土誌稿』第七輯 60 頁 (信濃毎日新聞社、1937 年)

あいの町(愛ノ町)

葛葉峠の地下に愛ノ町という村があったが、その村は昔、真那板山が崩落して地中に埋没してしまっただけらしい。

その亡念によるのだろうか、時折鶏の鳴く声が聞こえるという。- 郷津弘文『千国街道からみた日本の古代』301 頁 (銀河書房、1986 年)

塔の峰

深原に塔の峰という所がある。昔、五重塔が流れてこの地についた所だといふ伝説が伝えられている。

常誓寺の塔が地変のために漂着したのであろうという。そして一本杉と塔ノ峰とは水平線にあったと伝えられている。これによっていかに水かさが多かったかを想像し得るのである。- 郷津弘文『千国街道からみた日本の古代』301 頁

葛葉峠と常誓寺

真那板山が崩落して姫川をせき止めた。姫川は増水して大湖水が出現した。

沿岸の集落は湖底に埋められ、人家は上へ上へと押し流された。その当時は下寺や来馬の河原などはなかったらしい。集落は現在の河原の地表よりまだ下にあったらしい。

糸魚川にある常誓寺はこの騒ぎの時に引き移ったという。

下寺にある来馬郵便局のすぐ下の所は稗田山崩落のために川瀬が打ちつけて深く川底を掘った。その時大きなケヤキの二股が現れた。その大木は真那板山崩落の際、下寺の部落の上の段丘から崩れ落ちたものであろうという。段丘にはケヤキの林があって、今その切株がたくさん残っている。

また下寺という地名は、常誓寺があったためだろうという。葛葉峠のできた時代や常誓寺の移転した時代は更に分からない。常誓寺の記録では、享和四年 (一八〇四) に移転して、その時の住職は杉木祐珍氏であるという。- 『千国街道からみた日本の古代』302 頁

来馬の一本杉

北小谷村来馬の常法寺の上に一本杉といふ地名がある。今から三十年前迄は其処に周囲二丈余の杉の古木があった。其の杉の幹に鑿で掘った穴があって、昔舟を繫いだのだと云はれてみた相である。山崩で今の葛葉峠が出来た当時の事ではないかとも云はれてゐる。

- 『北安曇郡郷土誌稿』第一輯 64 頁

葛葉峠の一本杉

いろいろな伝説から総合すると、葛葉峠は真那板山の崩落によってできたらしい。姫川

が一時的に大湖水となったことも合点のいくことである。来馬常法寺の上に周囲二丈（約六尺）ばかりの杉の老木があった。それに二つの穴があげられて船をつないだという伝説がある。この歴史ある一本杉も伐採されて今はただ根株を残すのみである。その付近の地名を一本杉という。－郷津弘文『千国街道からみた日本の古代』303頁

山王の池の主

中土村清水山上区には、山王様が祀ってあり、其の附近に山王の池があった。この池の主は赤牛で、村の人々が草刈に行くと、其牛が出て一緒に遊んださうである。少し前その池を潰して大きな田にしたが、近年清水山部落の崩落と共にぬけて、又池になりはじめてゐる。－『北安曇郡郷土誌稿』第一輯 10頁

稗田山の崩落と金山和尚

昔、北小谷村の来馬に小谷五人衆のひとり横沢という家があった。その妻は姑と折合が悪く、何時かは姑を亡きものにしてやろうと決心しその機会をねらっていた。

たまたま元日の日、かねて用意の毒薬を朝茶に混じて姑に進めた。姑は何の気なしに祝いの茶だからといって主人に遣った。主人は知らずにその恐ろしい茶を飲み、直ちに年頭の挨拶に出かけ、先づ常法寺へ行って住職の金山和尚に年賀の挨拶をした。

金山和尚は大檀那の家の主人だから大いに歓待した。しばらくすると客人は腹痛を起して苦しみだし、人に扶けられて漸く帰宅することができた。家は周章狼狽、看護に全力を尽した。けれどもその効なく遂に不帰の客となった。家人の嘆きは一通りではなかった。

妻は和尚が毒殺したのだと訴えた。和尚はそれがために縛についた。和尚は無実であると一生懸命に弁明したが聴き許されず、遂重罪犯人として松本藩へ送致されることになった。和尚は如何にも無念でたまらないので、途中松ヶ峰に着いて来馬が見えなくなる時、足に力を入れて大地を踏んで叫んだ。

「人を無実の罪におとして覚えておれ。うら（俺）が無理ならこのままでもよいが、うらが無理でなかったらこの山ひっくりかえれ。」と地団駄ふむと、ついていた杖は地中に深く没した。すると晴天俄かにかき曇り、稗田山は大鳴動をした。

明治末年、稗田山は大崩落して来馬耕地を埋めたが、横沢家の所有地が最も被害が多かったと。これもその怨念が祟ったのだという。

それから来馬では金山様という碑を建てて、その霊を祀る処が数ヶ所に及んだ。

稗田山崩落の年の春、石坂の人たちは松ヶ峰を越えて稗田山の方めざし、浦川の深い谷を上っていく緋の衣を着た僧を見たという。－小谷村教育委員会編『小谷民俗誌』315頁（小谷村教育委員会、1979年）

稗田山崩壊の前報せのあった話

細野家の総本家と云はれる南小谷村石坂の上手に古くから伝へられてゐる弘法様のおかげがあって、何か大変事のある時などは家を守って下さったといふので非常に崇められてゐる。去る明治四十四年稗田山崩壊の折、夜になると同家の屋根峰に大坊主が登り鉢巻で突立って手を振り「逃げろ逃げろ」と叫んでゐるのを目撃した村人は「そら上手の弘法様がお立ちになったぞ、何か事がなければよいが」と口々に云ったといふ事である。かうしたことが三晩つゞいてその夜、物凄い音響と共に夢にも思はなかった稗田山が崩壊して浦川筋へ押出して来た。此の時上手の新宅松兵衛一家は全部埋没されてしまった。その直前至って実直な松兵衛氏の夢枕に坊主が現れ、やはり「逃げろ逃げろ」の言葉を三声残し

て去ったが氏はどうしても不思議でならなかったと語ったとのことである。

稗田山崩壊の年の春石坂の人は松ヶ峰を越えて稗田山の方へ浦川の深い谷を上って行く緋の衣を着た僧侶を見た相だ。それが崩落の前兆だったと云はれてゐる。この僧は無実の罪に陥れられた金山和尚で「小谷口碑集」三五頁に「怨念山を崩す」とあるのがそれである。－『北安曇郡郷土誌稿』第一輯 25 頁

かさい様

東小谷の石坂部落に堂があつて、その庭にかさい様といふ大きな石があつた。その石にさはればきつとおできが出来、又からだにおできの出来てゐる人はこのかさい様をお願いひすればなほして下さるといふおできの守り神様であつた。稗田山崩落のとき地下に埋つてしまつて影も形も見えないが、高さ五尺・周囲二三丈もある水成岩であつたといふ。－『北安曇郡郷土誌稿』第七輯 169 頁

大池の雨乞い

稗田山の奥に風吹岳がある。そこに大池がある。

昔、雨乞いのために神官を頼んで、村中の人がこの上に上つた。池の中に大きな岩がある。それに橋をかけ、神官を独り岩の上に送つた。そうして祈祷をしてもらった。祈祷の終わるころ池の中から大蛇が現れてその岩の周りを三巻きした。神官は驚き恐れてただちに陸へ飛び帰つて氣絶した。池中は見る見る増水し、天はにわかにかき曇つて大雨が降つてきたのである。皆の衆は恐れて神官を助けて下山した。

神官は一度は蘇つたが、これが原因となつて黄泉の旅へと去つた。－郷津弘文『千国街道からみた日本の古代』308 頁

宮本の社

昔南小谷村の坪ノ沢が山崩れのために姫川を堤き止めたことがあつた。其の時段々水嵩が増して北城村の塩島まで水を湛へたことがあつた。押出して来た土砂と一緒に馬のくつが流れて来て宮本の宮の大杉にかかつた。村人は「宮があぶない」といって白倉山へ御神体を御遷し申して祀つた。其の後水のひけてから白倉の神様はそこを飛び出して宮本へお帰りになつたので再び宮本に氏神様を祀ることとなつた。宮本へお帰りになつたときお通りになつた道は樹が裂けてをつたといふ。－『北安曇郡郷土誌稿』第七輯 216 頁

【信仰】

地辻りの信仰

小谷の地は地辻りの被害が多い。春の雪解けの頃から梅雨の頃にかけて、傾斜地で地盤の弱い所には、亀裂を生じ易い。これに雨水がしみ込んで地辻りを起こす。

このぬけ止めには昔から、戸隠神社へお参りに行きぬけ止めの祈祷をお願いする習慣がある。亀裂の生じた場所が、多くの人に被害を及ぼす場合とか共有地であれば仲間が相談して代表が戸隠まで代参に出かける。昔は徒歩で白馬村森上から、柳沢峠を越えて鬼無里村を通り、戸隠まで一日の強行程で歩いた。

戸隠の坊で一泊して祈祷をお願いし、お札と杭を二本とか四本とかを受けて帰り、ムラ人とお祭りをして、ぬけ止めの杭を亀裂の入っている要所に打ち込む、こうした信仰が、村人等に、伝えられている。－『小谷民俗誌』182 頁

山崩れを防いだ八幡様

南小谷村字立屋の八幡様は昔「まこびし」(地名)のぬけ出して来た時、戸板でもつて

防いで下すったので土砂は黒川沢と赤沢との両方に分れて、おかげで立屋部落は難を免れることが出来た。今でも八幡様を境にして土質の全く異ってゐるのはそのためであるといふ。—『北安曇郡郷土誌稿』第二輯 20 頁（郷土研究社、1930 年）

腕無し地藏

南小谷村弥太郎部落は戸数五軒山の麓の斜面に点在した部落である。この村の中央に地藏堂があつて、其の中には無造作に刻まれた片腕の無い地藏様が祀つてある。この地藏様については次の様な言ひ伝へがある。昔大雪崩が出て上の山からこの部落へ押し来て。五軒の家はすんでのことこの下になると見えた時、この雪崩は皆一ヶ所へ集つて来て五軒の家の中間にある地藏様のところを走つて一筋になつて下の川原へ落ち込んだ。そのために五軒の家は危ふく難を免れた。村中が川原へ下りて見ると、地藏様はちゃんと雪の上に座つてをられたが、よく見ると片腕がもげてゐる。村中はこれは地藏様が我々の身代りになつて下すったのに違ひないといつて、お堂を建て、この中へお祀りした。其後「おいたはしいから」といふので片腕をつくつておつけ申したが、翌朝行つて見ると落ちてゐる。何遍つけてもどうしても駄目だった。そこでこれは不思議なことだと口よせに占つてもらふと、お地藏様の申されるのに「俺を刻んで呉れた様な名人が作つて呉れなくてはつりあはない」とのことであつた。それで今にそのまゝになつてゐる。—『北安曇郡郷土誌稿』第二輯 29 頁

姫ヶ淵

南小谷村にも姫ヶ淵と呼ばれてゐる淵があるが、ここは大昔奴奈川姫が越後から姫川を遡つて休まれた処なので姫ヶ淵といふようになったのだといひ、姫川の名もこれから出たのだといふ。又この淵の涸れたときは国に変事のある前兆だといひ、日清・日露の両戦役の前には実際水の涸れたことがあつた。—『北安曇郡郷土誌稿』第七輯 2 頁

3 木曾与川の蛇抜

「蛇抜の話」（長野県木曾郡南木曾町）

南木曾町に与川という川が流れてゐます。その川をさかのぼつた山では、貴族の家を建てるために大ぜいの木こりが集められ、役人のもとでたくさん木が切られてゐました。その木こりの中に、正直者の与平という男がゐました。

ある雨の激しい夜、与平は「トン、トン」と小屋をたたく音に目をさました。恐る恐る戸を開けると、白い着物を着た女の人が悲しげに立っていました。そして女の方は「これ以上木を切り倒すと、必ず悪い事が起こるでしょう。」と言ひ残して雨の中にスーッと消えてしまいました。

あくる日、与平はこのことを仲間に話しました。木こりたちはこのことばを恐れて、仕事を続けることを拒みましたが、役人は聞き入れません。こわさのあまり、とうとう与平は「はらが痛い。」と嘘をついて仕事を休んでしまいました。

その夜、いつかの女の人が現われて、「あした雨が降り始めたら、山の頂へ必ず逃げて下さい。」と言ひ残して、夕闇の中へ消えていきました。

次の日、女の方の言つた通り、大雨が降り土砂くずれが起きました。このため、里の家々は後かたもなくつぶされて、中仙道もくずれ去つてしまいました。この時与平は、土砂

に流されていく白へびを見ました。実はあの女の人は白へびの仮の姿だったのです。

このことが起きてから、与平は木こりをやめて、馬方になり尾張の国から食物を運んだということです。

こういうわけで南木曾町には、水難を防ぐ石碑や地藏様が多くたてられています（『私たちが調べた木曾の伝説』第五集 19 頁、長野県木曾西高等学校地歴部、1980 年）。

→伝説のメッセージは何か

「中野沢の蛇抜」

天保十五年に尾張様が下山の中野沢というところでね。御用材を伐ってどえらい蛇抜け（水害による土砂崩れ）がしたそう。それで人夫がもうべったり（たくさん）流されたって。その供養の為に与川渡に地藏さんが建ったってわけよね（『民俗調査報告書長野県木曾郡南木曾町与川』72 頁、和洋女子大学民俗研究会、1978 年）。

「崩れ 蛇抜跡」（宝暦 9 年（1759）6 月の「木曾御材木方」）

山の欠ヶ口大石等落重なり候を崩れと申候、或ハ蛇抜跡と申候、或ハ小砂・小石交りの崩れも有之候、凡蛇抜と唱候ハ山奥の谷所々欠損し、大夕立の時分一旦ニ水筋を築埋メ候付、山奥より流れ出候谷水相滞り、水勢甚盛ニ成リ築埋候所を押切、又々大石等有之所ニ而一さゝえ持堪、水上の水弥増し候節再び押切り、大石・大木をも押流し損亡仕候儀ニ御座候、尤山の形勢ニ依而蛇抜の可有山者、大雨の節ハ予其心得をも仕候儀ニ御座候（『長野県史近世史料編』第六卷 376 頁）。

→江戸時代に木曾地方では、雨が降った後の土砂崩れ・土石流を蛇（蛇）抜と呼ぶ

天保15年5月27日の蛇抜

妻籠宿の天保 14 四年・15 年の『御用留』

御材木を伐り出すため、杣や日用が与川山に入って仕事をしていたところ、5 月 27 日の夜強雨で山抜が起きて、即死したり怪我をする者が出たという記載

尾張藩木曾材木奉行が天保 15 年 10 月に、同年の蛇抜の災害で死傷した人々に見舞金を贈ったのを確認した文書の最後に、「当年御用材木御伐り出し取り計らい候、与川下山中の沢入に当たり、五月二十七日の夜、山抜の節、杣・日用五人組の人数百十二人、内六人無事、七人怪我、九十九人死失いたし候」

『木曾与川山抜地藏一卷』（徳川林政史研究所）によれば死失人が 91 人、死失人で生所が知れない者 8 人、怪我人 7 人、合計 106 人とある。

三つのお地藏さん—災害と鎮魂—

①岐阜県恵那郡付知町の辻堂-80センチほどの石製

建立者は川路聖 謨で自費 10 両を費やし、天保 11 年（1840）2 月に完成の供養

天保 9 年 3 月 10 日に焼失した江戸城西の丸の再建。勘定吟味役だった川路聖謨＝「御普請御用」を命じられ、再建のため巨大な檜材を用意。主として尾張藩領の裏木曾山

聖謨は 4 月 22 日に江戸を出立、尾張熱田白鳥の木場で木を選び、閏 4 月 21 日に井出小路山に向かい、以後 7 月 12 日に江戸に帰るまで、現地で指揮

この間に木曾山では次々に異変＝巨大な石が小屋の上に落ちたり、怪獣や巨大な虫が出現したり、小屋が焼けたり、木曾地方で蛇抜と呼ぶ土石流が襲ったりして、多くの犠牲者が出た。さらに大木を伐ろうとすると木から血が流れ、木くずが元の木に戻ったりして、木こりが変死したという。

8月中旬に大きな蛇抜があつて死者

翌年、無事職務を果たした聖謨は犠牲者を悼んでお地蔵さんを建立

尾張藩主になった家荘は妖夢に悩まされ、怪異は江戸城大奥に及んだため、これは山の神の祟りだと將軍の命によって、尾張藩は天保 11 年、井出小路山の中に靈異石三基を建て、同十四年付知村に本殿を建てて護山神社

② 長野県木曾郡南木曾町の与川集落の入口、約 2 メートルの巨大な石地蔵

尾張藩が約 40 両の作料と、弘化 2 年 (1845) 2 月 26・27 日に供養費として約 30 両

天保 15 年 (1844) 5 月 27 日の夜、強雨のため与川の下山中の沢で蛇抜 = 99 人死亡

③ 長野県木曾郡大桑村の田光発電所脇、2 メートル程の石地蔵、中央製紙株式会社建立

大正 12 年 (1923) 7 月 17 日からの集中豪雨により、翌日の木曾谷南部には多くの蛇抜が発生。犠牲者は大桑村だけで死者 26 人、行方不明者 52 人、重傷者 9 人、軽傷者 25 人
最大の犠牲者 = 伊奈川の氾濫。中央製紙の発電所工事のため飯場

遭難死亡者名 = 日本人 10 人、朝鮮人 32 人。大桑村での死者・行方不明者のうち半数近い

おわりに

身近な伝承に着目しよう

嫌なことでも冷静に受け止めよう

家の中でも伝承を心懸けよう

伝承を読み解こう

ことわざや地名も災害を伝えている

身近な災害に気をつけよう